

阿川弘之 桃の宿

講談社

桃の宿

昭和五十七年三月二十三日 第一刷発行

著者——阿川弘之

© Hiroyuki Agawa 1982, Printed in Japan



発行者——三木 章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三二三 郵便番号二三 電話東京〇三—九四一—二二 振替東京六一五〇

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——大製株式会社

定価——一四〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

しくしくししきしけれ

嬉しい

9

つめたい

12

りりしい

15

わびしい

17

憎い

20

面白い

22

やさしい

25

無い

28

あざましい

30

まつたい

33

をかしい

35

じれつたい

38

*

桃の宿

41

鎌倉 横浜 ホノルル

46

ダイヤモンドは砂の中

53

作る者の喜び——読む人・書く人・作る人——

56

翔んでる中国

58

日本人の二つの顔

61

分り易さ

65

*

蒸気機関車運転記

71

私の初飛行

84

不思議な不思議なツキ物語

88

父親のお色直し

95

五十の子の子

106

*

菊の別れ——網野菊さん追想——

113

葬式鰻

122

瀧井さんのこはさとなつかしさ

136

卵を売る歌人

141

三日月さんの顔

145

一軍人の死

148

志賀直哉夫人の死

153

志賀直哉談片二つ

162

志賀直哉展へのお誘ひ

167

好きな詩	205
*	
天皇訪米私感	199
東郷元帥の功罪	195
わたしの海軍時代	192
山本聯合艦隊司令長官閣下	187
*	
素顔の芦田伸介	185
秋山庄太郎	181
崖の上のピアノリスト	179
風々録	172

『落首九十九』讃——廣作落首七つ——

209

「雪の遠足」讃

220

『阿房列車』讃

224

わが読書

226

『万葉幻視考』を読む

235

直井潔『一縷の川』

243

秋山加代『辛夷の花』小泉タエ『届かなかった手紙』

247

小泉タエ『父母の暦』

251

広津桃子『父 広津和郎』

254

私の文学

260

*

初出一覧

261

桃
の
宿

装帧
大泉
拓

しく しく し しき しけれ

嬉しい

中学一年生の時、形容詞の活用形を繰返し暗誦させられた。

「しくしくししきしけれ

しくしくししきしけれ」

そのころ私は、ちよつとしたことにもすぐ涙ぐむ弱虫で、「泣きみそ、みそみそ」、級友からミソと綽名をつけられてゐた。「花は笑ひ鳥は歌ふ友誼の御園みその」といふ校歌の、御園のところまで来ると、みんながわざと声を張り上げる。それでまた泣きさうになる。「しくしくししきしき」が、私には泣き声の表現のやうな気がして仕方がなかつた。

かういふ古い記憶がよみがへつて来て、これから十二ヶ月、毎回形容詞を題に、身の雑

事、衣食住のことを書かうと思ふ。「しくしくししき」は文語形、こちらは口語だが、「渋い」「甘い」「淋しい」「貴い」——、たくさんある中から、正月号にちなんでまづ「嬉しい」。

内田百閒先生は訪客ざらひで、

「世の中に人の来るこそ嬉しけれ

とはいふもののお前ではなし」

と、玄関に狂歌を貼り出してをられたさうだ。その真似をすれば、

「世の中に物もらふこそ嬉しけれ

とはいふもののこいつではなし」

「阿川さァん、荷物です。ハンコお願いします」で、包みを開いた途端困つた顔するやうな贈り物は、双方損である。自分がもらひたくない物を差上げる気はせず、こちらからの場合、あまり特殊な凝つた品は避けることにしてゐる。食料ならいはゆる珍味でなくて美味しい物、例へば菜漬。結婚祝ひならなるべく実用品、鍋釜コップ、洋傘、バスタオル、相手によつて国語辞典。

心の負担にならず、日常生活の中にまぎれこんでやがて忘れ去られるやうに——、ところが時々、のちになつて、

「変なお祝ひだつたから、くれたのは阿川さんと今でも覚えてますよ」

と苦笑気味で言はれる。変かしらと思ふ。

人さまの方がよつぽど「変な物」を下さる。不味い珍味も困るが、イタリア製花模様の革のペン皿、ドイツ製のでこでこ飾りがついた金ピカ寒暖計、厚意謝するに余りあり、ずぶん気を使つてさがし廻つて、洒落たつもりで見つけて来た高価な趣味のお品だらうが、どうにも始末が悪い。

三十余年前、海軍時代の旧友が祝ひにくれたシチュウ鍋は、ついこの間穴のあくまで愛用してゐたけれど、趣味のお品の「変な物」は、わが家では処を得ず、自然身のまはりから姿を消してしまふ。

勿体なくて、お歳暮なぞ、頂くならいつそ思ひ切つた日用雑貨を頂けませんかねと言ひたくなる。

「日用雑貨と仰有ると、何がよろしいんで？」

「ハンカチとクリーネックスですな」

子供のころから、泣きみその上に耳鼻咽喉の強いアレルギーがあつて、今も痰持ちの鼻水たらしだ。風邪をひくとそれがひどい状態になり、ティッシュ・ペーパーと鼻かみハンカチの消費、おびただしい量にのぼる。風邪は人一倍おそろしく、家族に風邪ひきがゐれば、

「俺、仕事してるから、寝てなさい寝てなさい」

半分息をつめて話しかけ、何度も何度もうがひをして、それでも風邪をひく。

お歳暮の季節は風邪の季節、誰かクリーネックス五十箱、麻の白いハンカチ二ダース、くれる人があつたらどんなに嬉しいかと思ふけれど、誰もくれない。

つめたい

「ああ、その話はしたらいかんねん」

と、開高健が手を振つて私を押しとどめた。

ドライ・マルティニの作り方について、めいめい我説を唱へ出すと、收拾がつかんやうになる、オックスフォードだかケンブリッジだかでは、マルティニ論議、禁制になつてゐるねん。

物議り開高によれば、年々歳々辛口を好む人が増えて来て、チャーチルはマルティニを飲む時、ベルモットの瓶をちらと横眼で眺めるだけであつた。ある男は、酒番にただ口で「ベルモ

ット」と言はせ、しかも時々「しッ、声が高い」と叱つた。

それはさうかも知れないけれど、誰もが賛成するはずの大原則は論じたつていいでせう。何かと言へば、要するにつめたくないドライ・マルティニは美味くないといふことです。辛口にするのはたやすいが、つめたくするのは案外むづかしいよ、君。

男の飲み物、カクテルの中のカクテルと称しながら、霜のおくほど冷やしたグラスでこれを供してくれる店は、十軒に一軒も無い。ジンの瓶があらかじめ冷やしてある店に至つては、めつたに無い。うんとつめたくしてくれと頼むと、角氷をたくさん入れてガラガラさんざん掻きまはして――、それなら冷えるに決つてゐるけど水っぽくなる。むろん、オン・ザ・ロックスはきらひだ。結局、自分の作るのが一番美味い。

「だから、ドライ・マルティニに関して我説を述べたらあかん、人それぞれでやりが無いと言つてゐるのです」

ならば、ビールの冷え具合に関して述べてもよろしいか。出版記念会、何々君を励ます会、人のスピーチを、

「ビールが生ぬるくなるよ。未だしやべつてゐる。ビールが不味くなるから早くやめてくれ」

と思ひながら聞いてゐる。長い面白くない御挨拶が終つて、

「以上、甚だ簡単ではございますが」

と言はれるとがっかりする。

入れ替り立ち替り、通例四、五十分から一時間、開宴前より卓上に並んでゐるビールは、その間、会場の熱気にすっかりあつたまつて、

「ではここに、何々君の前途を祝し、誰々様に乾杯の音頭を」

となつた時は、もう飲む気がしない。

ビールが目あてで来てゐるのではないけれど、つめたさにたいへん執着がある。ビールの味にうるさい人は、「冷えすぎたのはいやだ」と言ふが、生ぬるいのはもつといやだ。「乾杯」の際、一斉にさつとよく冷えたビールを繰り出して来るやうな神経の行きとどいた会にはめぐりあつたことが無い。

「分りますけどナ、何彼につけて文句の多いお齡ごろにさしかかつてをられるやうですなァ。そない口うるさいのは、老化現象の一つでつせ」

と開高が言つた。